

横川末吉先生（一）

山 本 保

（会員・佐伯市池船町）

元佐伯市鶴岡地区公民館長吉村虎丸氏から、佐伯史談会幹事汐月三代吉氏に、左のような書簡が届いた。

演劇「柵牟礼山回想異聞録」製作の顛末

昭和十一年のベルリン・オリンピック大会で活躍した吉田喜一水泳選手（百メートル背泳ぎ第五位）を育成した故横川末吉先生は、戦前旧制佐伯中学校に赴任し、地理・歴史の教師として教鞭を取られました。

若き横川先生が、五十年前に残した遺稿「佐伯惟定」が、佐伯鶴城高校の倉庫に保管されていることを知り、その遺稿を脚色して、劇に仕立ててみることは、埋もれた恩師の業績を世に出し、あわせて郷土の歴史を発掘して、佐伯市の観光価値を高めることにはと考えるました。

市教委・鶴岡区長会後援により、鶴岡婦人学級生役員

が出演することになり、連日の猛稽古のあと、佐伯市社会教育振興、高齢者学級発表大会（昭六一）の文化会館大ホールにおいて上演することができました。シナリオ研究の段階で、昭和十年頃の市に史談会がまだなかった頃に、単独でよくもこれ程までに、史実に忠実に創作したものだと思嘆いたしました。

主として、地理的分野を専門とした先生ですから、劇の舞台となる柵牟礼山（高さ二二〇メートル）を、実際に跋涉し、史的回想の中に、独特の地理的視角が伺えることは申すまでもありません。

峻険にして、鬼気こもる柵牟礼山に展開する、戦国興亡のドラマは、若き城主佐伯惟定（第十四代）の苦悩を中心に、観客に訴えるものがあつたと確信しております。

この劇の主要な道具となった「種ヶ島銃」は村上家よ

り、地中海楽器オカリナ（梟の声）は、菅一郎画伯の遺品であり、その他、衣装を海福寺様、光久寺様より借用、宣伝TOSテレビ効果担当木許栄氏と、幅の広い応援に感謝すると共に、とりわけ倉庫の奥に積み上げられた資料の縄を解き、横川先生の遺稿を探してくれた鶴城高校の中川教諭と事務長のお二人の労に、厚くお礼を申し上げます。

以上の顛末は、汐月三代吉氏（当時川澄化学・注射製造部長）の勧めにより、横川先生の遺稿「佐伯惟定」に添えて、演劇化するために脚色を担当した吉村虎丸が、記事といたしました。

以下は、昭和十一年佐伯中学校文集「鶴城」に掲載されてきたものである。

佐伯惟定

横 川 末 吉

今からざっと三百五十年前。天正十四年（一五八六）

十月の或夜、豊後佐伯氏の居城梅牟礼山の奥まった一室では、当主惟定（第十四代）が物愁ひに沈んでいた。

惟定時に十八歳、早熟であった当時でも、何処かあどけない所が口元に見られる。頑丈な肩の辺から、太い頸筋へかけては、猪の様な勇敢さを示しているが、稍々神経質にせり寄った眉毛は、なみなみならぬ思慮があるらしい。

島津義久の弟家久は、日薩の大軍を選りすぐって、潮の様に豊後に殺到した。本隊は大野郡三重の松尾城に陣し、後一押しで府内城も、彼等の手に落ちる形勢であった。豊後日向を連ねる街道は、大野郡宇目郷（小野市村重岡村）を通っていたので、幸いに、佐伯氏は未だ島津の攻撃に見舞われてはいなかった。併し、街道に近い因尾では、既に島津軍と佐伯軍との間に、小競合いが行われたし、遠からず、家久が佐伯氏に対し何等かの処置に出る事は必至であった。

降伏？ 死守？ 運命の岐路に立つ佐伯氏、而も十八歳の惟定の双肩に試練の日は迫る。降伏？ 祖母岳大明神以来の連綿たる名家の誉れを汚し、南豊の前衛として長い間、忠勤を抽んでた宗家大友氏に不忠となる。

死守？ 全九州の強豪の勝ちに乗じた勢いは、疾風枯葉を駆けるようであるのに、全く一たまりもあるまい。

憂うつに考え込んだ惟定の前には、粗末な机、その上には、佐伯莊一円の絵図が広げてあった。宇目郷を通る街道には、敵の輜重や後続部隊が、明日の獲物に張り切って行軍しているだろう。筆を矢立てから取出した惟定は、黒々と薩軍の進路を記入した。大勢はどうあろうとも、佐伯莊を死守する決心は、既に固く惟定の腹に出来ていたが、硬軟相半ばする将士の士気や、薩軍攻撃進路の予想など、將たる者の苦勞は山程もあつた。

山岳重畳した南海部郡は、海上を除けば自ら城をなしているが、山峽は三重口・因尾口・川原木口・大越口・黒沢口と至る処に通じている。その何れも薩軍の侵入して来る可能性がある。一つに重点を置けば、予想の裏切られた時が恐ろしいし、だからと云って、凡ての山峽に兵力を分つ事は、小藩でもって全く不可能である。

床の間の砂時計は、亥の刻(午後十時)を示していたが、思い出した様に立ち上がった惟定は、廊下に出た。神無月(陰曆十月)の冷々した夜気は、何となしに殺気迄も帯びている様である。廊下は、大きな杉の木立を縫うて巽(東南)の方に延びている。杉のてっぺんで梟が鳴いた。廊下の尽きる所は武具倉である。深夜、何のた

めに唯一人で武具倉に惟定は行くのだろう。星明りに照らし出された惟定の横顔には、思い余つた真剣さより外に何物も見出せなかつた。

宿直の者のいぶかる顔に、無言で軽く会釈した惟定は無気味な音をたてて、観音開き(真中から左右に開くようになつた開き戸)になつた武具倉に入った。鈍いボンボりに照らし出された内部には、大神氏以来の戦と云う戦に、血ぬられた刀剣がぎっしり詰まっていた。鬼氣迫るものがある。

ずっと奥の一區画しきられた所で、惟定の足は静かに釘付になつた。そこには、南蛮渡来の鉄砲がずらりと並んでいた。

誠に鉄砲の伝来は、戦国末期の形勢を一変させた。長篠城の戦(天正三年)には、旧式戦術の鬼才と云われた武田氏さえ、鉄砲の前には、二十四将の屍をさらした。之がなくては最早戦は論ぜられない迄になっていた。じつと見つめた惟定の顔には、だんだんと血の色が動いてきた。

やっと之で三千挺と軽くつぶやいて、よく手入れされたのをなでながら、ここ数年來、凡ゆる費用を切り詰め

て武器購入に狂奔した。全く文字通り、心血を注いだ事を思い浮べた。十年の苦心、今こそ役に立つ時が来たのだ。

森閑として静まり返った武具倉に、惟定の連想は更に果てなく続く、「匡徳もいるし」先頃日向からやって来て、客分となっている。

山田土佐入道匡徳は双びない軍学者であった。困難に遭遇して、頼もしくなる底の人物であったし、何よりも良かったのは、鉄砲を使用する新戦術に暗くない事であった。三千挺も、匡徳によつてはじめて、伯來を得た駿馬の様に威力を発揮する事が出来る筈であった。猛烈な訓練は来る日も来る日も、汗と油にまみれて番匠川原に実行せられた。それも従来ほとんど顧みられなかった、足軽を先頭にした密集狙撃部隊の訓練であった。個人戦闘から部隊戦闘へ、新時代の目くらましい動きにも、決して佐伯氏は後れていなかった。各個狙撃でも下針を撃つ者が三千人も出来た。由來勇猛を誇る佐伯氏に、匡徳の加わった事は、正に錦上花を添えた観がある。

併し、敵は名だたる薩摩勢、と考え及ぶ時、惟定の顔には又一条の暗い不安と必殺の意気が去來する。

外に出ると、大手の塀を越して、番匠川が榎牟礼城を圍繞してゆっくり流れているのが、星月夜にはほかに浮かぶ。菩提寺の龍護寺のあたりを振り返って、一瞬じつと黙待した惟定はあらためて番匠川原を見渡した。河原のそこここに見えるかがり火は、風雲急なので非常警戒についた、佐伯氏麾下の夜陣である。昨夜精悍をもつてなる因尾勢も、七馬に白泡ふかせて到着したし、古市の城下町には溢れる様に武士が宿営している。それにしても榎牟礼城は何と静かな事であろう。一切の準備は成り一触即発の危機をはらんで、正に風の前の静かさとも言うか。

厨（調理場）にとつて返した惟定は、勝手知った戸棚から土器を出して、之で濁酒（どぶろく）をカメから、たっぷりくみ取った。賢い母の心遣いで、炊（すい）の末に至る迄、人手を借らずにやる訓練を日頃から施されていた惟定であった。

もう子の刻（夜半の十二時）も近いだろう。全身を耳と目とした大手の不寝の武士は、りりしい装束で気おしい切っていた。三つ星（オリオン座の中央に直列する三個の恒星）が、大手門の真上で美しく光っている。（続く）